

介入方法は、対象者を無作為に2グループに分け、一方には「意図的」な家庭訪問を行い（介入群）、他方には通常の活動を提供（対照群：事実上は何もしない）。介入群には、意図的な家庭訪問の説明の基準になる記事を書いた「便り」を持参する。家庭訪問の際には、便りの内容を手がかりに、介護者の介護への自信を高め、介護への満足が少しでも感じられるようにかかわる（意識づけをする）。家庭訪問の回数は、月1回ペースを基本にし、期間中に3回は訪問する。介入者は原則として地区担当保健婦である。その数は述べ15人であった。

訪問の意図は、1回目、2回目、3回目それぞれ ①介護者の行って来た介護を肯定的に聞き取り、そのこと（肯定していること）を意識して伝えること、②介護者と被介護者の心理的交流の良い円環作用を高めること、③介護を継続することによる人間的成長に気づいてもらうことである。それぞれの目的を表現するような便りを毎回作成して持参した。便りの使い方や訪問意図の徹底は、介入者全員での事前のロールプレイによって行った。

3) 効果の判定

介護者の介護困難感や介護満足感を測定する目的で開発された35項目からなる尺度を使用し、介護者の変化を測定した³⁾。この尺度は訪問看護利用者を対象に山本が開発したものであり、介護健康度アセスメントツールと称し、信頼性と妥当性が検証されている。この尺度は

介護健康度に注目したところに特徴があり、本研究の効果を判定するのに適していると思われる。

4) 属性の把握

要介護高齢者の属性として、ADL、介護保険の要介護度、年齢等、主介護者の属性として、年齢、家族構成、体調等を把握した。

5) 研究期間：研究期間は平成12年9月から12月である。

6) 解析方法

看護者の負担や満足を得点化し、統計解析ソフトSPSS Ver.10.0を用いて解析した。

C. 結果

1) 対象者について

研究を完結できたのは、介入群20例、対照群19例であった。これ以外に介入群において2例が途中からの拒否、入院により、対照群の3例が入院、死亡により完結できなかった。以降の結果は完結できた39例について示す。

表1に完結できた対象者の属性を示した。介入群、対照群ともにAランクのものが少数含まれていたが、含めたまま解析を進めた。要介護者の年齢、主介護者の年齢に

表1 対象者の属性

	合計	本人									介護者				
		ADLランク			要介護度					年齢	性		年齢		
		A	B	C	5	4	3	2	1	未		女	男		
介入群	20ケース	3	11	6	7	8	2	2	1		0	83.9±10.2	20	0	63±9.1
対照群	19ケース	4	11	4	3	6	4	2	1		3	77.3±9.9	17	2	70.6±9.5

は有意差は見られなかった。

2) 介護負担感得点、介護満足感得点の変化について

山本によれば、介護負担感には「役割疲弊」、「周囲からの孤立」、「高齢者との関係」、

「症状の対処困難」の4つ下位尺度があり、介護満足感は「高齢者への愛着」、「介護についての自信」、「介護からの学び」、「規範の実践」の4つの下位尺度がある。表2に下位尺度それぞれの得点の平均値と、介入後の変化の平均値を標準化して示した。介

対照群では増加しており、有意差が見られた。介護満足感では、介入群が増加し、対照群が減少していたが、有意差は認められなかった。

3) ケースごとの総合介護負担感得点と総合介護満足感得点

表2 下位尺度の平均得点の比較

	役割疲弊		孤立		対処困難		関係		総合介護困難	
	事前値	変化値	事前値	変化値	事前値	変化値	事前値	変化値	事前値	変化値
介入群	98	-1.67	62.5	-2.5	76.1	-5.6	59.2	-2.5	73.9	-3.1
対照群	90.2	13.7	53.1	8.3	64.3	17.5	47.4	12.3	63.7	13
P値	0.389	0.019	0.202	0.059	0.184	0.008	0.159	0.061	0.089	0.002
		*		†		**		†		**

	愛着		自信		学び		規範		総合介護満足	
	事前値	変化値	事前値	変化値	事前値	変化値	事前値	変化値	事前値	変化値
介入群	87.7	-1.7	104.7	-1.3	96.4	5	101.7	0.3	97.6	0.6
対照群	100.4	-10.2	96.5	-1.4	93.3	-7.9	107.7	-4.9	99.5	-6.1
P値	0.135	0.062	0.22	0.99	0.649	0.024	0.479	0.377	0.77	0.121
		†				†				*

図1にケースごとの介入前後の総合介護負担感得点の変化と総合介護満足感得点

の変化を示した。左に行くほど負担が減ったことを示し、上に行くほど満足が増えたことを示す。最も望ましいケースは第4象現に、最も望ましくないケースは第2象現に属することになる。灰色丸で示した介入群が第4象現

入前の値は、学びにおいて介入群の方がやや高い得点であったことを除いてはいずれにおいても介入群と対照群間に差は認められなかった。負担に関する介入後の値は、役割疲弊、対処困難において介入群方が有意に改善し、孤立及び関係においても改善傾向が見られた。満足に関する介入後の値は、学びにおいて介入群が改善しており、また愛着においては悪化の傾向が介入群の方が少ない傾向が見られた。総合得点は、介護負担感では介入群において減少し、

図2にそれぞれの象現ごとのケースの数を示した。最も望ましい効果のあったケースの所属する第4象現には介入群の8ケース(40%)が属していたのに対し、対照群は1ケース(5%)しか所属しなかった。その反対の第2象現には、介入群は3ケース(15%)しか所属しなかったのに対し、対照群は8ケース(42%)が所属していた。

3) 介入前の得点と介入後の得点変化との関連について

表3に介入前のそれぞれの得点と、介入後の変化の相関について、介入群、対照群

図1 満足と負担の散布図

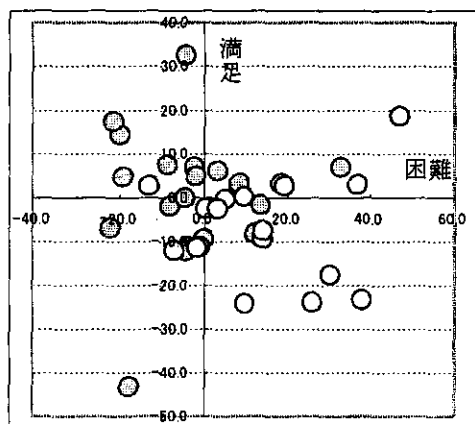


図2 象現ごとのケース数

第4象現		第1象現	
介入群(20人中)	人	介入群(20人中)	人
8	40%	4	20%
対照群(19人中)	1	対照群(19人中)	6
第3象現		第2象現	
介入群(20人中)	5	介入群(20人中)	3
対照群(19人中)	4	対照群(19人中)	8

に分けて示した。介入群において関連のある項目が多く見られた。

ったが、介入効果はどちらかといえば介護負担感に強く出ているようであった。この事については、介護負担感が減れば、満足

表3 介入前の特天地と介入効果との相関

	疲弊	孤立	対処困難	関係	総合介護困難	愛着	自信	学び	規範	総合介護満足	
対照群	疲弊変化	-0.572 **	-0.035	-0.218	-0.067	-0.362	0.080	0.450 †	0.127	0.049	0.210
	孤立変化	-0.151	-0.086	-0.126	0.253	-0.068	-0.187	0.193	-0.225	0.037	-0.073
	困難変化	0.091	0.154	-0.261	0.349	0.085	-0.344	0.110	-0.263	-0.232	-0.245
	関係変化	0.210	0.279	-0.071	-0.134	0.111	-0.438 †	-0.178	-0.427 †	-0.314	-0.434 †
	総合困難変化	-0.143	0.113	-0.223	0.111	-0.082	-0.289	0.188	-0.252	-0.159	-0.178
	愛着変化	-0.026	0.218	0.073	0.416	0.196	-0.407	-0.011	-0.211	-0.106	-0.253
	自信変化	0.216	0.406	-0.041	0.029	0.208	-0.297	-0.095	-0.201	-0.397	-0.314
	学び変化	0.019	0.144	-0.286	0.286	0.024	-0.446 †	0.064	-0.378	-0.136	-0.304
	規範変化	0.209	0.137	-0.099	0.240	0.163	-0.415 †	-0.261	-0.225	-0.461 *	-0.432
	総合満足変化	0.144	0.313	-0.119	0.330	0.203	-0.535 *	-0.105	-0.349	-0.375	-0.446 †
介入群	疲弊変化	-0.579 **	-0.180	-0.591 **	0.021	-0.463 *	0.197	0.042	0.312	0.085	0.178
	孤立変化	0.074	-0.482 *	-0.300	0.080	-0.205	-0.081	0.105	0.095	0.036	0.039
	困難変化	-0.061	0.073	-0.570 **	0.024	-0.198	0.023	0.055	0.422 †	-0.019	0.122
	関係変化	-0.245	-0.378	-0.281	-0.669 ***	-0.602 **	0.032	-0.097	0.174	0.081	0.059
	総合困難変化	-0.264	-0.319	-0.665 ***	-0.253	-0.550 **	0.052	0.028	0.407 †	0.058	0.148
	愛着変化	0.048	0.034	-0.042	-0.484 **	-0.202	-0.226	-0.075	-0.205	0.080	-0.108
	自信変化	-0.217	0.292	-0.123	-0.252	-0.137	-0.265	-0.501 *	-0.101	-0.186	-0.293
	学び変化	0.111	0.021	0.230	-0.263	0.014	-0.468 *	-0.355	-0.581 **	-0.292	-0.478 *
	規範変化	-0.218	0.153	-0.069	-0.198	-0.138	-0.095	-0.321	-0.074	-0.306	-0.235
	総合満足変化	-0.098	0.157	0.002	-0.329	-0.127	-0.309	-0.394	-0.283	-0.242	-0.346

D. 考察

1) 介入効果の有無について

図2に示したとおり、第4象現に介入群が集中しており、介入による満足を高め、負担を軽減する効果が示されていると思われる。表3においても、介入群の方が介入後の変化が介入前の値に関連している項目が多く、介入者が対象者の状況に応じた介入を行った結果であることが示唆されていると思われる。第2象現には逆に42%の対照群が属し、そのことから介入群も介入がなければ同様であったことが想定され、介入があったために第4象現に移動したと認めても良いのではないかとと思われる。

さらに表2に示したように、介入群と対照群の下位尺度得点及び総合得点に有意差がみられたことから、介入効果は歴然として考えられる。

2) 介入効果の性質について

介入目的は介護満足感を高めることであ

感に直接反映されなくてもそれにつながるような心的機序が働くことが期待され、当初目的とした効果が潜在的にはあると判断しても差し支えないのではないと思われる。

3) 介入技術の個人差について

この研究では多くの地区担当保健婦が介入者となった。その技量には個人差が大きいことや、介護者と介入者との関係形成には時間を要する場合とそれほどでもない場合があると想定される。これらをできるだけ薄めるために事前にロールプレイを行った。介入効果が顕著に示されたことから、個人差についてはある程度薄められたのではないと思われる。

4) 介入前得点と高価の関係について

表3にも示したように介入前の値と効果の大きさには関連が見られるものいくつかあった。負担が大きければそれを増やす効果が出やすく、満足が少なければそれを

多くする効果が出やすいことは想像に難くない。しかし、本研究においては介入群と対照群に介入前の得点に有意差は見られなかったため、この点は本研究で得られた結果に大きく影響することはないと思われる。

5) 便りの効果について

介入の際には、必ずその訪問が目的にしていることについての便りを持参した。このことは多くの保健婦がかかわるこの研究において、介入の目的をよりそろえ、介護者に共通の刺激を与えることを助けたのではないかと思われる。

6) 介入回数、介入期間について

介入期間はもう少し長く取った方が効果がより大きくなるのではないかと思われた。今後機会があれば、期間や回数と効果との関連について検証していきたいと考えている。

E. 結論

1. 地区担当保健婦による家庭訪問が、介護者の介護負担感を減少させることが明らかになった。
2. 事前ロールプレイの実施や訪問内容を示す便りを持参することが、その効果発揮に役立ったのではないかと思われる。

F. 文献

- 1) 長谷川喜代美、石垣和子他：特別擁護老人ホーム入所待機者の続柄と介護負担感に関する研究。家族看護学研究、5(2)：86-93、2000。
- 2) 石垣和子：高齢者を介護する家族の介護負担とその対処に影響する要因の検討に関する研究。平成11年度厚生科学研究費補助金長寿科学総合研究事業研究報告書、59-64、2000

- 3) 山本則子、杉下知子：高齢者介護の介護健康度アセスメントツールの開発。笹川医学医療研究財団報告書、2000

研究協力者

長谷川喜代美、松村幸子、田中芳和（以上浜松医科大学）

式守晴子、鈴木知代（以上聖隷クリストファー看護大学）

小木康江、平口志津子、鈴木陽子他（以上浜松市健康増進課）

山本則子（Visiting Scholar, School of Public Health, UCLA）

Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の 編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ

雑誌

発表者名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
山田孝子, 蘭牟田洋美, 安村誠司, 阿彦忠之	閉じこもり高齢者調査から見えてきたニーズ	保健婦雑誌	55(10)	811-814	1999
蘭牟田洋美, 安村誠司, 深尾彰	閉じこもり高齢者の特徴—山形における実態調査から—	保健の科学	41(11)	813-818	1999
田高悦子, 金川克子	在宅寝たきり高齢者のADL低下予防のためのプログラムの効果に関する研究	日本地域看護学会誌	1(1)	42-49	1999
別所遊子, 細谷たき子, 北出順子, 縣留美, 川端昭宏	寝たきり高齢者の訪問看護におけるリハビリに関する研究	福井医科大学研究雑誌	1(1)	191-198	2000
別所遊子, 細谷たき子, 長谷川美香, 吉田幸代, 北出順子, 縣留美, 川端昭宏	寝たきり高齢者の在宅ケアにおける訪問看護職と理学療法士との連携	福井医科大学研究雑誌	1(3)	495-509	2000
別所遊子, 長谷川美香, 北出順子, 縣留美, 川端昭宏	在宅高齢者の日常生活動作能力と訪問看護婦が行うリハビリケア	北陸公衆衛生学会誌	27(1)	1-7	2000
田高悦子, 金川克子, 立浦紀代子, 他	在宅寝たきり高齢者のADL低下予防プログラム—技法と効果評価—	訪問看護と介護	5(7)	562-574	2000
田高悦子, 金川克子, 立浦紀代子	寝たきり予防のケアプログラムの実際	保健の科学	41(11)	836-840	2000
田高悦子, 金川克子, 立浦紀代子	在宅寝たきり高齢者のADL低下予防のためのプログラムの効果に関する研究—1年半後のADLと転帰—	日本地域看護学会誌	3(1)	52-58	2001

20000201

以降のページは雑誌／図書等に掲載された論文となりますので
「研究成果の刊行に関する一覧表」をご参照ください。

「研究成果の刊行に関する一覧表」

平成 12 年度厚生省科学研究費補助金

長寿科学総合研究事業 総括・分担研究報告書

発行年月日：2001 年 3 月 31 日

発行責任者：石川県立看護大学

金川 克子

TEL&FAX. 076-281-8367
